【コラム 6】ネパールでの一年を通じて

坂　英　樹
（陸上自衛隊３等陸佐）

はじめに

防衛庁から防衛省に組織が変わるとともに、国際平和協力活動が本来任務化、さらに同活動を主任務とする中央即応集団が新編された自衛隊にとっては大きな節目の年、2007 年 3 月から私は国際平和協力隊員として 2008 年 3 月まで派遣されていました。

ネパールは、北は中国、南はインドと国境を接する南北約 200km、東西約 900km の小さな国です。首都のカトマンズは、奄美大島とほぼ同緯度にあります。

中国との国境は、世界の屋根、ヒマラヤ山脈が連なり、南は野生の象やトラが生息するジャングル地帯で、バルディアやチトワンにある国立公園は知る人ぞ知る、野生動物の宝庫です。その恵まれた自然環境を活かした観光業が主要な外貨獲得手段になっています。

鉱物資源に乏しいネパールは、一人当たりの GDP が 470 ドルほどで、国民の 5～6 割が農業従事者と言われており、多くの物資をインドからの輸入に頼っています。このため、インフラが脆弱なネパールでは雨期になると、土砂崩れなどで道路があちこちで寸断され物流が滞りがちになります。特にガソリンやプロパンガスが首都カトマンズで品薄になり、スタンドは日々長蛇の列という状況です。一方、乾期は河川の水量が減少するため、発電量が低下しカトマンズでは停電が一日 16 時間にもなることがあります。

また、その地理的な特性から様々な面でインドとの繋がりが強く、文化・宗教の面でも似通った点が沢山あります。

そのような国、ネパールは、政府とネパール共産党（毛沢東主義派）、通称マオイストと呼ばれる反政府勢力との間で 10 年にわたり内戦が続いていました。しかし、2006 年に両者の間に包括和平合意がなされました。そして、その和平合意の履行確保のため国連の介入を要請、国連ネパール政治ミッション（UNMIN）が設立され、日本政府も自衛官を軍事監視要員として派遣することに決定したのです。

本稿では、ネパールでの軍事監視要員としての勤務を通じ、私が個人的に感じたことを述べてみようと思います。

Ⅰ　階級制度（カースト）を起因とする社会の隔絶

私たち軍事監視要員の任務は大きく二つでした。①マオイストが収容されているキャンプでの監視業務およびネパール国軍の駐屯地へのパトロールを通じて両者が停戦合意に反するような活動をしていないかチェックすることと、②両者の武器の管理が合意通りになされているかを確認することです。任務上、マオイストとネパール国軍両者と接する機会は頻繁にあり、そこから見えてくることが沢山あります。そのうちの一つが、両者の出身階級です。

先述の通り、ネパールはインドとの繋がりが強く、その影響は様々なところに反映されて

います。カースト制度もその一つで、マオイスト軍とネパール国軍の出身階級の差にも見られます。ご承知の通り、カーストは、古くからつたわる社会制度であり、個々人の階級を規定すると同時に、たずさわるべき職業をはじめ、結婚その他さまざまな社会生活のありようを決定します。そして、子は親のカーストをかならず継承するため、生まれ落ちた時に人生が決められてしまいます。さらに、カーストは地縁、血縁、職能が密接にからみあった排他的な集団で、一定の自治機能をも持っていると言われています。したがって、業種そのものが一つのカーストの集団であるとも考えられ、そこに別のカーストが入り込むことに関して大きな拒絶感が伴うことが予想されます。

ネパール国軍の構成員は、どちらかというとカーストの中でも高位に属し、そのためか、自尊心の強い人々の集まりという印象を受けました。また、もともと王の軍隊であったため、封建色の強い組織だということが言えると思います。特に、将校の中にはマオイスト軍に対する嫌悪感をあからさまに示し、彼らとの統合には反対と明言する方もいました。

一方、マオイストですが、党の上層部はそれなりの知識階級が占めているようです。しかし、軍の構成員は低い階層の出身者が多いようです。そもそも、マオイストは、王制の打倒、カースト制度の廃止等をその武力闘争の目的としていましたから、当然とも言えるかもしれません。したがって、経済的にも恵まれず、基本教育すら満足に受けることができなかった人々が占めています。兵士の中には文盲の人間も見受けられました。

このような階級に基づく差別は、日常生活の中にも見られます。ある低層階級に属する方に話を伺ったときのことです。私が、今、この国は大きな変革を迎えようとしているがそのことについてどう思うか尋ねたところ、「今以上に悪い待遇になるのなら、今のままがよい。」という回答が返ってきました。

また、こんなことがありました。私がアパートを借りる際に掃除夫を雇用することにしたのですが、彼との契約交渉の際にトイレの掃除もお願いしたいと申し出たところ、紹介者に「彼はそういうことはできない。もしトイレ掃除をさせたいなら、別の人間を雇う必要がある。」と言われ、何のことか意味が分からず理由を尋ねたところ、「彼はそういう仕事をする身分ではない。」という答えを耳にしたとき、私はハッとなりました。

生まれ落ちた階級がその人の一生をほぼ決めてしまうカーストという制度は、ネパールの社会に未だに根強く残っており、日々の生活の中にも密接に組み込まれているのです。この現実をまざまざと突きつけられた瞬間でした。

Ⅱ　統治機構の機能不全と国民の不信感

先述した通り、ネパールはインフラが脆弱な国です。それは国家の統治機構にも言えることで、統治組織は一応存在しますが、内戦の影響もあり、しっかりと機能しているとは言い難い状況です。しかも、農業を主要産業とするコミュニティですから、自然とその地域の有力者がどうしても幅を利かせることになり、コミュニティ内で紛争が起きると裁判所や行政に訴えるのではなく、地域の有力者や名士に持ち込むことが多いようです。

また、法による救済制度が機能していないため、何らかの不利益が生じた場合は、その回

復を図るために自力救済に走ることが多くなります。例えば、村の子供が道路でトラックにはねられ死亡した場合、警察に訴えるのではなく、村人が協力をして道路を封鎖、トラックの往来を止めて輸送を生業とする者全体に補償を求めるような行為に及びます。いわゆる「バンダ（ネパール語で『閉める』の意）」です。

実際に私も車両でのパトロールの際に何度か遭遇したことがあります。そして、バンダを行っている者から、もし通過したいのなら金銭を払うように要求されたことがあります。そういった場合は、同行している通訳を通じて国連の要員であることを説明し、通して貰いました。しかし、そのような現場において警察の姿を見かけたという記憶があまりないのです。また、ごく稀にいたとしても積極的にバンダを排除するようなことはなく、どちらかというと傍観していたように見えました。

このようなことから考えても、ネパールにおいては社会における「法治」という意識がうすいと言えるでしょう。直接的な法執行を担任する（警察）行政に携わる者が自分の保有する法的な権限や手続きを理解していないため、具体的な事案に遭遇してもどのように対応すればよいのか判らない。よって、傍観するか、さらにひどい場合にはその場で恣意的な判断を行うため、法執行の適否を判断する司法の場に持ち込まれることが稀になってしまう。裏を返せば、法執行機関である行政や司法に対する国民の理解不足でもあり、また、不信感の表れに他ならないと私は思います。

おわりに

平和構築において、治安部門改革（Security Sector Reform）という分野はますます重要視されています。国家の責務の中でも治安の維持が最優先事項の一つにあげられるからでしょう。しかしながら、イラクでもアフガニスタンでも治安の回復には大変な苦労をしています。

人はどうしても目に見える結果を求めがちです。ですから、SSR においても目に見える「箱」、つまり、組織や機構の改革に取りかかることになります。しかし、組織を改編しても実際にその中で任務を行う「個人」の意識が変わらなければ、やはりその実効性は疑わしいものとなるでしょう。だからといって、考えを押しつけて意識を変えようとしても、それは反発を招きかねません。

さらに、組織や制度を改革し、中に入る個人の意識を変えることができたとしても、その健全な機能を維持するためには、組織や制度そのものを理解し、活用して、チェックできるだけの社会全体の支えが必要です。つまり、国民全体の協力が不可欠であり、そのためには彼らの意識についても変えていく必要があると思うのです。

このような意味で、SSR は、それだけを切り離して考えられるものではなく、社会における「法の支配」の確立という大きなプロジェクトの一機能なのではないだろうかと私は思います。そして、「法の支配」を正統化し、担保するには、民主主義が必要なのだと思うのです。

しかし、民主主義を実現するために日本と米国が採用している制度が異なるように、ネパ

ールにも相応しい制度が当然あってしかるべきです。そして、その制度はネパール国民自らが見つけるしかないのだと思います。

私はネパールに到着して、初めてカトマンズの街を歩いていて驚いたことがあります。これほど貧しい国が 10 年にわたる内戦に苦しんだにもかかわらず、ストリートチルドレンが、私が想像していたよりもずっと少なかったことです。その理由は、カーストによって構成されるそれぞれの階級がコミュニティを作っていて、家族がいなければ親族、親族もなければ周囲の人間が身寄りのない子供の面倒を見るからだと言われています。そのような考えが宗教と結びついていることは想像に難くありません。

階級制度は民主主義とは相容れないものです。しかし、この国に根強く残り、生活と密着している制度は一朝一夕で変えることができるものではないことも確かだと思うのです。

ですが、ネパールでは、この難題である階級の壁を紛争当事者が武器を置き交渉のテーブルに着き、武力ではなく、話し合いによって解決しようとしています。

平和の再構築において我々がどんな役割を求められているのかを考えるとき、そして、一国の制度を部外者である我々が語るとき、視点をどこに置き、さらに、何をなすべきかという問いは常につきまとう課題だと思います。

国軍にもマオイストにも二十歳そこそこのまだ少年の面影を残すあどけない笑顔をみせる隊員が沢山いました。彼らの手が再び同胞の血で染められることのないように、一軍事監視要員の私にできることは何なのか？日々考え続けた一年だったように思います。